

基本・原点は研究から

いろいろな所で「基本に戻る」「原点に戻る」が語られます。そのことは、間違いではありませんし、大切なことでもあります。しかし、その言葉の使われ方を探してみると、意外と、「なぜ、それが叫ばれるようになったのか」という部分については見過ごされていることがありますし、「基本や原点とは、いったい何を意味しているのか」ということについても議論が少ないという気がします。

実は、「ゆとり論争」にも、そんなところが見られました。「ゆとり教育が求められた背景は、一体何だったのか」、「ゆとりとは、そもそも一体何だったのか」などが、よそに行ってしまうと「ゆとり＝減らすこと」で、すべての議論が進んだような気がします。それが今に至って「見直し・検討」の大合唱になっているとしたら、再確認すべきは、改革の方向性にあるはずで、「教育再生議論」も、その上に立って整理されてこそ、基本法改正という大きな変革を受けた我々教育関係者の果たすべき責務に繋がってくれるはずで

では、「基本・原点・なぜ・どうして・方向性」などに取り組むにはどうすればいいのでしょうか。

私たちセンターは、昔から、「研修と研究の一体化」というキーワードで、すべての事業に取り組んできました。つまり、「研究の裏づけがない実践はない」ということであり、子供たちに生きる実践は「研究の積み上げからでない」と本物ではない」ということです。そのような姿勢こそが「教師の学び」であると私たちは考えてきました。したがって、「基本・原点」を表面だけでなく、しっかりと受け止めるとしたら、それは「研究」による以外にはないとも考えます。

今年度、お届けする「研究紀要」は、「あすなろ」のスタートから数えて 11 号目です。しかし、そこには、三島の時代から受け継いだ理念が脈々と生きています。まさに「ここに不易がある」ということです。

これらの研究をきっかけに、現場の先生方一人ひとりが、「学ぶ姿勢」を持っていただければ、やがて「自信」を持って戦えるようになり、楽しい「学校づくり」が始まるはずで

静岡県総合教育センター
所長 天野 龍生